

高台寺

宮本百合子

青空文庫

三等の切符を買って、平土間の最前列に座った。一番終りの日で、彼等の後は棧敷さじきの隅までぎつしりの人であった。一間と離れぬところに、舞台が高く見えた。

やがて囃はやしが始り、短い序詞がすむと、地方じかたから一声高く「都おどりは」と云った。

「よういやさ」

揚げ幕の後に一種異様にちりぢりばらばらのような刺戟的な大勢の掛声がそれに応える。同時に、左右の花道から、鼓、太鼓、笛、鉦かねにのつて一隊ずつの踊り子が振袖をひるがえして繰り出して来た。彼方の花道を見ようとすると、もう此方から来ている。華やかな桃色が走馬燈のように視覚にちらつき、いかにも女性的な興奮とノンセンスな賑わいが場内を熱くする。――

一列に舞台の上できまり、さて桜の枝をかざして横を向いたり、廻ったり、単純な振りの踊りが始つたが、その中から顔馴染を見出すのは、案外容易でなかつた。花道を繰り出して来た時、おやあれかと思ひ、熱心に近づく顔を見守ると別人だ。左の端から五人目のおどり子が、踊りながら頻りに此方を見、ふつとしなをする眼元を此方からも見なおしたら、それが桃籠であつた。やんちやな彼女が、さも尤もつともらしく桜の枝を上げたり下げたり

しているのがおかしく、彼等はひとりでに笑えた。彼女も、舞台の上でくると廻る拍手に何喰わぬ顔で彼等に向い舌を出した。ずっと上手かみてに、まるで知らない顔に挟まれ、里栄が一人おとなしく踊っている。

昼間、里栄が、

「今日出番どすさかい、是非来とおくれやつしや」

と云った。桃龍も居合わせ、

「きつとどつせ、好う好う左の花道見といやつしや」

と云ったが、自分一人になった時、

「ほんまに間違えてお座りやしたらあきまへんえ、左の花道のねきいお座りやつしや」

と念を押した。そのとき何とも思わず今こうやつて見ると、つまり桃龍は、一番自分の目のつき易い場所へ彼等を座らせたことになっていた。肝心の踊の間じゆう、たまに入れ換えることはあつても殆ど始から終りまで里栄は広い舞台の彼方の端れで何もならず、桃龍が絶えず彼等の目前にあつた。段々観ていると、彼女の特徴である大きな鼻や我儘そうな口許が人形のような化粧の下からはつきりして来た。おっとりした里栄に好意を感じつつ、自然位置の関係から彼等は桃龍を中心にする。こんなことにも彼女等二人の性格の違いが

現われていて面白かった。

「伶俐なやつちゃ」

章子が桃龍を苦笑した。

彼等のすぐ後に、京都大学の学生が二人仲居をつれて見物していた。制服を着、帽子を胡座あくらの上にのせ、浮れていた。地方じかたの唄をすっかり暗誦して合あわせたり、

「ほらほら、あれがそや」

「ええなあ……恍惚うつとりする程ええやないか」

一菊と云う舞妓は、舞いながら、学生が何か合図するのだろう、笑いを押えようとし、典型的に舞妓らしい口元を賢おこげに歪めた。

夥おびただしい群集に混つてそこを出、買物してから花見小路へ来かかると、夜の通りに一盛りすんだ後の静けさが満ちていた。大きな張りぬきの桜の樹が道に飾りつけてあり、雪洞ほんぼりの灯が、爛漫とした花を本もののように下から照している。

一台の俵くるまが勢よく表通りからその横丁へ曲つて来た。幌をはずして若い女が斜めに乗り、白い小さい顔が幸福そうに笑っている。見ると、俵の後に一人若い袴をつけた男つかまが捉り、俵と共に走っていた。更に数間遅れて一かたまりの学生が、

「一菊バンザーイ！ 一菊バンザーイ！」

歓声をあげ、俵を追って駈けて来る。揉もまれながら俵はどんどん進み、一緒に走ってゆく男の幅広い下駄で踵を打つ音が耳立って淋しく聞えた。

野蛮な声の爆発が鎮ると、都おどりのある間だけ点される提灯の赤い色が夜気に冴える感じであった。

空には月があり、ゆっくり歩いていると肩のあたりがしつとり重り、薄ら寒い晩であった。彼等は帰るなり火鉢に手をかざしていると、

「どうでござりました」

おかみ
女将さんが煎茶道具をもって登って来た。

「ようようお見やしたか」

「顔違いがしてしもて、偉い難儀しました」

章子が笑いながら京都弁で答えた。

「ああなると、どれがどれやら一向分らんようになるなあ」

「そうです、一寸は見分けがつきまへんやろ、然し男はんになると、そのなかから、ふん

あこにによるなあと見て観といやすのが、また楽しみどつしやろさかいなあ」

深い鉢に粟羊羹があつた。濃い紅べにうわぐすり釉薬の支那風の鉢とこつくり黄色い粟の色のとり合わせが美しく、明るい卓の上に輝やいた。女将は仲間でお茶人さんと云われ、一草亭の許へ出入りしたりしていた。小間の床に青楓の横物をちよつと懸ける、そういう趣味が茶器の好みにも現われているのであつた。

「——これ美味おいしいわね、どこの」

「河村のんどつせ」

章子と東京の袋物の話など始めた女将の、大柄ななりに干からびたような反齒そつぱの顔を見ているうちに、ひろ子は或ることから一種のユーモアを感じおかしくなつて来た。彼女は、その感情をかくして、

「一寸、あなたの手見せてごらんなさい」

と云つた。

「手てどすか？ 何でどす？」

女将は、白い木綿の襟を見せた縞の胸元を反らすようにし、自分の掌を表かえし裏かえし見た。

「まあ、一寸見せてさ」

「へえ、何どつしやる……偉い可愛らしい手どつせ」

肉の薄い血色のわるい掌であった。然し、彼女がたった三本だけ名を知っている掌筋のうち、恋愛の筋がいかにもよそで聞いた女将の身の上と符合しているようなので、ひろ子は少し喫驚びっくりした。

「ほらね、だからあらそわれない！」

「なんどす」

「手の筋は正直だからね、女将さんがちよいちよいは浮気すると書いてあるの」

章子が、ふつとふき出しそうになるのを手で顎を撫で上げて胡魔化し、ひろ子へ流ながしめ眄めを使った。章子はひろ子の魂胆を感じいたのであった。ひろ子も笑い出したが、

「本当よ、でも」

と力を入れて云った。

「そか？ どれ」

章子は座布団ごとそばへずりよつて来た。

「どうです女将さん、当りますか」

片手をひろ子に執られたまんま、息をのむようにし、

「こわいもんどすなあ」

そして、本気に、

「あんたはん、ほんまに手相お見やすのんどすか？——どの筋がそうどす——浮気するたらどこに書いとおす」

ひろ子は思う壺に嵌り^{はま}すぎて、おかしいのと照れるので、少し赧くなりながら説明した。

「ほら、ね、この人指し指と中指の間から出てる筋、これがずっと一本で通ってないでしよう、初め一寸で一旦切れ——これが十九年前の分よ。それからこうやってまた一寸、また一寸。——御覧なさい、あとは数知れず、じゃないの」

「——浄瑠璃や」

二人は、女将が直ぐは笑いもせず、黒目をよせるような顔をして猶しげしげ自分の掌を見ているので、二重におかしく失笑した。女将は、彼等に身上話をきかせ、その中で、十九年前仲居をしていたとき一人の男を世話され、間もなくその男の児と二人放られて今日まで血の涙の辛苦で一人立ちして来たど、賢女伝を創作した。

「女ほど詰らんもんおへんな、ちよつとええ目させて貰たと思たら十九年の辛棒や。阿呆らし！ なんぼ銭くれはつてももう御免どす」

然し、それは嘘なのであった。そんな作り話をきかされる柄に見えるかと、彼等は宿へかえる路も笑つたのであった。

女将が階下へ下りかける、階子口ですれ違いに、

「ゲンコツあん、お居やすか」

「まだ寝んねおしいしまへんのん」

桃龍と里栄が入って来た。里栄は、都踊りへ出たままの顔と髪で、

「おおしんど！」

直ぐそこにある茶を注いで飲んだ。

「何でそんなに息切らしてんのや」

「走って来たんやわ」

「なあ、へエ、桃龍はんちゆうたら、あての手無理ご無体に引っぱってどんどんどん走らはるのやもん……」

桃龍は、文楽人形のようなグロテスクなところがどこにかある顔で対手を睨むような横

目した。

「——怪けつたい体な舞まわされて、走らずにいられへんわ」

都踊りの最後の稽古の日、その日はまあ大事の日だから、自信のある年とし嵩かさの連中もちゃんと時間前に集っていたところへ、桃龍がたった一人遅れ、しかも寝ぼけ面で行った。平気さが、瀧沢という年寄の師匠の癩に触ったと見え、

「そもう桃龍はんは、何でもようでけるさかい、遅れて来ても大事おへんやろ」

と厭味を云った。それが出来ない方で寧ろ有名な桃龍は笑い出して、満座の中でぬうと師匠の顔の先へ指さしつつ、

「うーそう」

と云った。

「ほんまにあのときのお師匠つしよはんの顔！ 笑えて笑えてかななんだわ。——『うーそう』ちゆうなこと、よう云わはったわ」

桃龍は知らん顔で卓の上の硯すずりばこ箱ばこをあけ、いたずら描きを始めた。

「——近くで見たら、その顔、まあ化物やな」

「いやらしおっしゃろほんまに、踊のある間、あてら顔滅茶苦茶やわ……痛い痛いわ、荒

れて」

「……何なんや、それ」

「ワセリン」

「——ようとするな」

童子と二人の話声をききながら、ひろ子は興味をもつて、桃龍のいたずら描きを眺めていた。「桃龍はんの泣き面」「ゲンコツあんと蕪かぶらはん」——「ゲンコツあんと蕪かぶらはん」は彼等が並んで歩いている後姿を描いたのだが、滑稽な中によく特徴を捕えてあつた。

「上手うまいな」

「……ええもん見せたげまひよか」

手提袋から、彼女は手帖を一つ出した。二寸に三寸位の緑色の手帖であつた。或る頁には日記のようなものが書いてあり、或る頁にはいろいろの絵が細かく万年筆で描いてある。時事漫画に久夫でも描きそうな野球試合鳥瞰図があるとすると、西洋の女どじつがい、男がい、それぞれに文句が附いていたのであつた。「晴れて嬉しい新世帯」都々逸どじつのような見だしの下に、新夫婦が睦むつじそうにさし向いになっている。やがて口論の場面が来、最後には奇想天外的に一匹の猿が登場する。瘠しぼせた猿がちよこなんと止り木にのつている。前に立つ

て飽かれた妻が重そうな丸鬚を傾け、

「猿公、旦那はんどこへ行かはったか知らんか」

と訊いている。――

絵物語の女が桃龍自身の通り大きな鼻をもっているところ、境遇的な感じ方で描くところ、若い女らしいものが流露してそれが桃龍だけに、ひろ子は可憐な気がした。

「さ、あて着物かえさしてもらお」

隈を自分の顔に描いて遊んでいた里栄が立ち上った。

「あても――」

二人は隅で帯を解き始めたが、いきなり里栄が、端折をおろした裾を引ずって、章子のそばへよつて来た。

「なあへエ、ゲンコツあん、ええことして遊びまほ。――立ちいおしやす」

「何するのや」

「おとなしゆうして、あてらにまかしといやしたらええにやわ」

桃龍が云いながら章子をつらまえ、着ている襦袢をむきかけた。

「これ！ 怪体なことせんとき」

章子はあわてて胸元を押えた。

「ふあ！ 様子してはる——」

大騒ぎで襦袍を脱がせ、それを自分が羽織つたなりで里栄は今まで着ていた長襦袢を先ず着せ、青竹色の着物を着せ、紅塩瀬に金泥で竹を描いた帯まで胸高に締めさせられた章子の様子には、ひろ子も腹をいたくした。

「なんえ、これ！ かわいそうな目に会わさんといとくれ、頼むぜ」

「黒人くろんぼの花嫁！ 黒人くろんぼの花嫁！」

ひろ子が笑い涙を溜めながら囃した。

「こんな嫁はんあらへん——親出おやでや、親出おやでや」

「階下したへいて見せたる」

「——一寸待つて、何ぞ頭へ被らなあかへんわ、ええもんがある、ええもんがある」
その上に姉様かぶりを手拭でさせられた章子をしょびいて、どやどや部屋を出た。

「え——、里栄はんのお姉御、ゲン里はんでごさい、よろしゅおたの申しますう」

「——何事どす？」

茶の間の襖ふすまを開けて顔を出すなりこの始末に女将は、

「へえ」

忽ち、反歯を飛ばしそうに笑い出してしまった。

「いじらしい目に会わはるもんどつせなあ、へ？ ようかわいがったげるさかいな、精だしてお稼ぎや」

桃龍が、笑いもせずもう一遍、

「え——、里榮はんの姉妹御ゲン里はんでござい……」

章子は、獅々舞いが子供を嚇すように胸を拳でたたきたたき笑いこけている小婢こおんなの方へじりじりよって行つた。

「怖こわア」

「阿呆かいな」

階段の中程へ腰をおろし、下の板敷の騒動をひろ子も始めは興にのり、笑い笑い瞰みおろ下していた。が、暫くそうやっているうち、ひろ子は、ひとを笑わせ自分も笑っている章子が可哀そうみたいな妙な心持になつて来た。紅い帯を胸から巻き、派手な藤色に厚く白で菊を刺繍した半襟をこつてり出したところ、章子の浅黒い上の気ほせた顔立ちとぶつかつて、醜怪な見ものであつた。章子自身それを心得てうわてに笑殺しているのであろうが、ひろ子

は皆が寄つてたかつて飽きもせずそれをアハアハ笑い倒しているのを見るときはいい気持がしなかつた。ひろ子は先へ自分だけ二階に引かえした。そこに着物の散らばっている座敷の床柱にもたまれ、皆の戻つて来るのを待ちつつひろ子はこの気持を章子に話すときを想像し、渋甘い微笑を一人洩した。章子は一応、

「そんなの偏狭さ」

と云うに定さままっているから。

翌々日は日曜日であつた。蒔絵を観るため、彼等は高台寺へ行つた。蒔絵のある建物が裏山の中腹にあつて、下から登龍の階と云うのを渡つて行くようになっていた。遠洲の案とかで、登つてゆくときには龍の白い腹だけ、降りには龍の背を黒く踏んで来るように、階段の角度が工夫してあるのであつた。

満足もしない心持で寺を出たが、ぶらぶら歩きながら頭の中へ浮ばせて見ると、登龍の階でも、それを工夫した人間の感興が却つて実物を見ているときより理解されるような気がした。やや湿っぽい山気、松林、そこへ龍を描こうとする着想は、常時生氣あるものであつたに違いない。然し平等院の眺めでさえ、今日では周囲に修正を加えて一旦頭へ入れ

てからでない、心に躍り込んで来る美が尠い。

「——京都の文化そのものがそうじゃない？ 大ざっぱに云って」

「或る点そう思う、私も」

全然反対の例にとれる龍安寺の石庭のことなど喋りながら、彼等は真葛ヶ原をぬけた。芝生の上はかなりの人出で、毛氈もうせんの上に重箱を開いて酒を飲んでいる連中が幾組もあった。大人の遊山の様がいかに京都らしい印象を彼等に与えた。

円山の方へ向って行く。往來が疎らになつた彼方から、女が二人來た。ぼんやり互の顔が見分けられる近きになると、大きな声で一方が呼びかけた。

「ゲンコツアン！」

桃龍とも一人、彼等の余りよく知らない女であつた。

「——おふれまいか？」

例の癖の睨むような横目で、桃龍は章子の問いに合点した。

「どこへおいきやすの」

「どこって——その辺ぶらぶらしようと思つて」

「ふーん。……ほんならあてもいく。なあ、へエ」

つれに振向いて耳打ちし先へやって、彼等は章子達と近所の金魚屋へ入った。入口は植木屋のようで、短いだらだら坂を数歩下ると開いた地面がある。支那鉢や普通の木の箱があつて、いろんな種類の金魚が泳いでいた。或る箱の葭簀の下では支那らんちゅうの目の醒めるようなのが魁偉な尾鰭を重々しく動かしていた。葭簀を洩れた日光が余り深くない水にさす。異様に白く、或は金焰色に鱗片が燦めき、厚手に装飾的な感じがひろ子に支那の瑪瑙や玉の造花を連想させた。

「なあ、へエ、あてらうちにこんな五匹いるわ」

それは普通の出目金で、真黒なのが、自分の黒さに間諷付いたように間を元気に動き廻っている。揺れる水面にさす青葉のかけ、桃龍の袂の色が、早い夏のようなうだ。

彼等は円山の奥まで歩き、亭に休んだ。亭のある高みの下を智恩院へゆく道が続いていた。その道を越して、もっと広い眺めが展げている。下の道を時々人が通り、亭の附近は静かであつた。花の咲かない躑躅の植込みの前にベンチがあり、彼等が行つたとき、そう若くない夫婦がかけていい心地そうに目前の眺望に向つていた。桃龍は、着物の裾を両方の脚に巻きつけるような工合にして暫く亭にかけていたが、やがて、

「えろ仲よそうにしてはる、ちよつとなぶつて来てやろ」

つかつかその人達の方へ行つた。火を貰つて此方向きにかえつて来ながら彼女は嬉しうに笑つて舌を出した。彼等もつり込まれて思わず笑い、たばこ 葎の火をかりた人の方を見ると、その人々も笑っている。日曜日らしい寛ろいだ情景でひろ子は愉快を感じた。ベンチの男の人の黒い鍔つば広帽が公園の自由画のようであつた。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第三卷」新日本出版社

1979（昭和54）年3月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

親本：「宮本百合子全集 第三卷」河出書房

1952（昭和27）年2月発行

初出：「新潮」

1927（昭和2）年7月号

入力：柴田卓治

校正：米田進

2002年9月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

高台寺

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>